

目的 本研究は、「授業とは何か」を解明する為のごく基礎的な研究である。
授業活動は、教師・生徒・教材の3つの核から構成されるが、本研究では、特に教師と生徒について「学習」過程の両者の相互作用に視点をおき、特に、授業活動において人間の内部の生理機能がどのような変化を示すかを調べた。

方法 授業には家庭科の教材を用い、また、測定した教師と生徒の身体生理機能は、心拍を主としたが、その他、呼吸、GSR、EOGについても記録した。
授業内容は、授業行動の分析から組み立てた11の単一授業行動を、教師—生徒間の距離を2mと5mにして行なった実験と、教師の態度を *rigid* と *flexible* に二分して、それぞれに、講義法、問答法を組み入れた個別授業と実習を含む一斉授業である。被験者は、教師役2名と生徒役の大学生13名である。

結果 教師は講義で負担が重いと考えられるのに対して、生徒は問答法に変化があること、教師と生徒の相互作用があると負担が増す傾向があること、「問答」や「暗記・暗誦」などの思考及び精神作業を要する行動に特徴的な反応パターンがあることから、授業行動における生理機能の反応パターンには、授業方法による影響が大きいと考えられる。
また、教師の態度による顕著な差はみられなかったが、距離が大きいと教師の負担が大きい傾向もみられた。